2/19　ネヘミヤ記 1 章 1-11 節「しもべの祈りに耳を傾けてください」

小池 宏明 牧師

王の献酌官のネヘミヤが、ペルシアの王の許可を得てエルサレムに派遣されたのは紀元前 445 年のことであった。ネヘミヤは先週取り上げたエズラと同じ時代を生きる人物である。この時代は第一次の帰還から 100 年近く経っていたので、エルサレムの住民は再建された神の宮（神殿）を中心に町も城壁も再建して、平穏な日常を回復しているはずだった。しかし、現実は困難が続いて、周りの異教徒から辱めを受けていた。そのような現状を知ったネヘミヤは、大いに悲しんで祈り始める。

＊ネヘミヤの祈り

1 章のネヘミヤの祈りの中で 3 点に注目したい。①エズラの祈りと同様に、先祖たちの罪を、自分自身の「背きの罪」として受け止め、主の御前で告白していること。②自分たちが、主なる神様の「しもべ」であるという立場をわきまえていること。「しもべ」とは、主人である神様に対して「奴隷」という自覚を持つことである。彼は、しもべの立場をないがしろにして、主の信頼を裏切ったことを正直に告白してる。その裏切りが、主の民たちを散り散りばらばらにしたのだ。③モーセに命じられた御ことばの約束に堅く立っていること。主なる神様はご自分の命令を守らない者を追放した。しかし、主は、御ことばを守り行うならば、天の果てに散らされていても必ず呼び集めると約束してくださった。ネヘミヤはその約束に信頼して祈った。

＊祈ってから行動するネヘミヤ

2 章に入ると、ネヘミヤの沈んだ顔を見て案じたアルタクセルクセス王が、「何を望んでいるのか」と尋ねた。ネヘミヤはすぐに答えずに、天の神様に祈ってから「ユダの地に遣わして、町を再建させてください」と願い出た。その後、王によってユダ州の総督として派遣され、エルサレムの町の城壁や城門を建て直す時には、様々な外敵による妨害が入ったり、住民たちが一致できなかったり、多くの困難があったが、その都度、ネヘミヤは祈りながら最善を尽くして、対処していった。このようなネヘミヤの姿勢は、ユダヤ人たちにも影響を与えて、何よりもまず主を信頼して祈る民へと成長させた。

＊祈りは教会の心臓

今日に生きる私たちは、ネヘミヤの姿から、祈ることを最優先することを学びたい。キリスト教会の歴史も、常に、信仰者の祈りから始まって、歴史が動いて来た。

私たちは祈りの人になっていく、祈りの教会を目指すと心に決めて、新しい一週間の歩みをスタートしよう。